

かつての鎌倉海岸七里ガ浜地区について（元資料）

一般財団法人土木研究センターなぎさ総合研究所兼
日本大学理工学部海洋建築工学科

工博 宇多 高明

— 目 次 —

1. 古写真に基づく侵食前の稲村ヶ崎の姿の復元	1-1
1.1 はじめに	1-1
1.2 古写真の判読	1-2
1.3 まとめ	1-6

1. 古写真に基づく侵食前の稲村ヶ崎の姿の復元

1.1 はじめに

近年、七里ヶ浜中央部にあるプリンス駐車場から稲村ヶ崎間の海岸は著しく侵食され、広く岩盤が露出し、稲村ヶ崎の西側に隣接して流入する極楽寺川河口の右岸側にのみ狭い砂浜が残される状況となっている。その砂浜も砂鉄で覆われ、前浜勾配も 1/7 程度と急となっている。このように侵食された海岸において、砂浜の復元のための養浜が計画されているが、砂浜の復元にあたっては過去の砂浜状況の把握が大事である。そこで七里ヶ浜周辺の自治会関係者などに依頼して七里ヶ浜の過去の海浜状況を表す写真を収集したところ、多数の写真が集まった。そこで、これらより海浜状況の判読が可能な 5 枚の写真を選び、各写真から当時の海浜状況の復元を行った。

1.2 古写真の判読



写真-1 極楽寺川河口右岸から稲村ヶ崎を望む
(1970年代, 稲村ヶ崎自治会河辺匡太氏提供)

1970年代に極楽寺川の河口右岸側から稲村ヶ崎を望んだ写真である。稲村ヶ崎の海蝕崖の先端近くまで汀線で遊ぶ人々が見えることから、当時稲村ヶ崎の先端近傍まで海浜が広がっていたことが分かる。また、海浜で子供が凧揚げを行っていることから、平坦でかなり広い前浜があったこと、さらに砂浜が黒いことから、当時もこの付近には砂鉄が多く堆積していたことが分かる。また稲村ヶ崎の崖上部には建物が残されていた。



写真-2 駐車場から稲村ヶ崎方面を望む
(1979年, 小松眞理子氏提供)

七里ヶ浜中央部のプリンス駐車場から稲村ヶ崎方面を望んで撮影された写真である。海岸線に沿って国道134号線が走っており、その海側端には高さ約2mの堆砂垣が伸びていた。堆砂垣の海側には表面を植生で覆われた砂丘があった。また堆砂垣の開口部（写真の○印）からは国道を走行するクルマの姿が見える。この開口部から汀線へと緩やかな傾斜の道ができており、白い砂の堆積した海浜へと降りることができた。現在は植生で覆われた緩やかな斜面は完全に消失していることから、その後大きな変化が起きたことが分かる。さらにこの写真でも稲村ヶ崎の崖の上には家屋があったことが見て取れる。



写真-3 プリンズ駐車場の東側隣接部から稲村ヶ崎を遠望
(2000年4月23日, 加田務氏提供)

プリンズ駐車場の東側の海浜から稲村ヶ崎方面を望んで撮影された写真で、沖合に白濁した砕波線が見えることから4月の大潮期の干潮時に撮影された写真であり、汀線付近を子供が散策する状況から、2000年当時、細砂で構成された緩勾配の海浜がプリンズ駐車場から稲村ヶ崎方面へと長く続いていたことが分かる。



写真-4 極楽寺川河口右岸にある砂浜から稲村ヶ崎を望む
(2015～2017年頃, 隈元光太郎氏提供)

2015～2017年頃稲村ヶ崎方面を望んで撮影された写真である。汀線をサーファーが裸足で歩く状況から、細砂からなる緩勾配の砂浜が広がっていたことが分かる。一方、稲村ヶ崎の崖の崩落が進み、写真-1と比較すると崖の崩壊地の面積が広がるとともに、稲村ヶ崎の先端近傍まであった砂浜が消失し、海蝕崖に波が直接当たるようになっていた。



写真-5 駐車場からの砂投入状況
(2012年6月11日, 七里ガ浜町内会中原 功氏提供)

当時駐車場の隅角部から養浜時の土砂投入から直接行われていた。

1.3 まとめ

七里ヶ浜は、今でこそ著しく侵食され、岩盤の露出が進んでいるが、古写真によれば、過去には細砂で構成された緩勾配の砂浜が存在したことが確認できた。また、1970年代と比較すると、稲村ヶ崎の海蝕崖の崩落が進んできたことも分かった。これらから考えれば、稲村ヶ崎の海蝕崖の後退が進み、突出した岬が持つ沿岸漂砂の阻止能力が減少し、それにより七里ヶ浜を構成していた中砂・細砂が運び去られた可能性が高いことが分かる。同時に、海浜の復元にあたって中砂・細砂を用いることは不自然ではないと考えられる。